日本語

1. 性格及び目標

ア．性格

今日の私たちの社会は、情報通信技術、ビッグデータ、人工知能などを活用した第4次産業革命により、超知能・超連結社会へと移行している。今や、社会は相互コミュニケーションと協働を通じた集団知能が切実に必要となった。それに伴い、学校でも知識教育より人格形成の教育を重視し、さらには世界を包括する共同体的な価値観と創造性・包容性を備えた自己主導的な人材育成の必要性が強調されるようになった。

外国語は、世界に出ていくための開かれた窓として隣人とコミュニケーションをとり、共同体の一員として生きる上で不可欠なツールである。これにより異なる文化圏で生活する人々の考え方や文化を理解し、共有することができる。したがって、外国語教科は国家の歴史と文化理解を基盤として相互協力する世界市民を育成する必須教科だと言える。

地理的にも近い韓国と日本は、古代から言語や文化などの様々な面で互いに影響を与え合い、発展してきた。これらの関係は今日まで続いている。特に急速に変化するグローバライゼーションの流れの中で、政治、経済、外交などの多様な面で、韓国と日本は相互理解と協力が求められる状況に置かれている。このような時代に日本語学習は、日本人と直接コミュニケーションをとり、日本文化や情報を正しく理解するきっかけとなり、誤解や偏見のない協力関係を築いていく重要な礎となるだろう。

「日本語」は、日本語を初めて学ぶ学習者が日常生活に関連する基本的な表現を学ぶことで、基礎的な日本語のコミュニケーション能力を養い、日本文化に対する理解を基に相互文化的な観点から他文化に対する包容力と理解力を育むことで世界市民としての能力を育成する教科である。

1．目標

日常生活で必要な基礎的なコミュニケーション能力と日本文化に対する理解を基に、相互文化的な観点から日本人と交流ができる能力を育む。具体的な目標は以下の通りである。

(1) 簡単な意思疎通の基本表現を状況や目的に合わせて活用する。

(2) 様々なメディアを活用して、日本人との日常的かつ簡単な情報交換とコミュニケーションを取る。

(3) 相互文化的な観点から日本文化を理解し、世界市民意識を育成する。

２．内容体系と達成基準

1. 内容体系

|  |
| --- |
| ※ 内容体系は、以下に示された『言語資料』に基づく。  ※ 文法は、日本で発行された『日本語文法事典（日本語文法学会編）』、『新版日本語教育事典（日本語教育学会編）』、『現代日本語文法（日本語記述文法研究会編）』などの内容を参考にする。  ・**発音と文字**: 日本語の標準的な発音と現代かなづかいに従う。  ・**語彙**: [表Ⅰ]に示された基本語彙を中心に約450語程度の単語を用いることを推奨する。  ・**文法**: [表Ⅰ]に示された文法要素と[表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]の文法内容を参考にする。  ・**コミュニケーション表現**: [表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]を中心に取り扱う。 |

1. 聞く

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア  カテゴリー  区分 | • 音声的な特徴に注意しながら文を聞き、単語を識別したり意味を理解することが聞く力の基本だ。  • 文章や対話を聞いて内容を理解したり推測することは、聴解力の向上に役立つ。  • 相手の話を耳を傾け、共感する態度は円滑なコミュニケーションの基盤となる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | • 音声的な特徴（聴音障害、長音・短音、拗音、撥音など） |
| • 単語（基本的な意味や派生的な意味）  • 簡単な句（単語の結合関係、慣用表現）  • 簡単な文 |
| • 挨拶・自己紹介（出会い・別れ、外出・帰宅、訪問、食事、年末、新年、祝い、自己紹介、他人の紹介、家族の紹介など）  • 配慮・意思伝達（感謝、謝罪、ほめ、励まし・慰め、断り・辞退、謙虚、遺憾、苦情、承諾・同意、希望・意志、目的、意見提示、訂正・否定など）  • 情報交換（存在・場所、時間・時、選択、比較、方法・理由、状態、趣味・関心、能力・可能、経験、確認、案内、推測、述べる、状況説明など）  • 行為要求（依頼・指示、禁止、勧誘、助言・提案、許可、警告など）  • 対話の進行（ためらい、応じる、感嘆、声かけ、聞き返し、話題展開・転換など） |
| 課程・機能 | • 文字や単語を聞いて識別する能力  • 単語、句、文の意味を理解する能力  • 適切に反応する能力  • キーワードや大意を理解したり類推する能力  • 内容を理解する能力 |
| 価値・態度 | • 内容に興味を持ち積極的に参加する態度  • 相手の話に対する尊重と傾聴する態度  • 多様な観点や意見に対する共感と受け入れの態度 |

1. 話す

カテゴリー

区分

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | • 明確な意思伝達をするためには、音声的な特徴に注意して話すことが重要だ。  • 多様な表現を状況に合わせて話すことは、コミュニケーションにおいて重要な要素だ。  • 言語文化を基に相手を配慮しながら話すことは、円滑なコミュニケーションにつながる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | • 音声的な特徴（清音・濁音、長音・短音、拗音、促音など） |
| • 単語（基本的な意味や派生的な意味）  • 音声的な特徴（単語の結合関係、慣用表現）  • 簡単な文 |
| • 挨拶･自己紹介（出会い･別れ、外出･帰宅、訪問、食事、年末、新年、祝い、自己紹介、他者紹介、家族紹介など）  • 配慮･意思伝達（感謝、謝罪、ほめ、励まし･慰め、断り･辞退、謙遜、遺憾、苦情、承諾･同意、希望･意志、目的、意見提示、訂正･否定など）  • 情報交換（存在･場所、時間･時、選択、比較、方法･理由、状態、趣味･関心、能力･可能、経験、確認、案内、推測、陳述、状況説明など）  • 行為要求（依頼･指示、禁止、勧誘、助言･提案、許可、警告など）  • 対話の進行（言葉づかい、相槌、感嘆、声かけ、聞き返し、話題展開･転換など）  • 言語文化（依頼方法、承諾･断りの方法、呼称の言い方、表現的特徴など）  • 非言語文化（身振り、手振りなど） |
| 課程・理解 | • 発声特徴に注意して話す  • 描写や説明する  • 意志や情報を表現する  • 状況に合わせて話す  • 地位や親密度、言語文化などの違いを理解し表現する |
| 価値・態度 | • 言語文化的な違いに対する配慮と相手への尊重  • 他人との相互作用時の協力的なコミュニケーション  • 積極的な話し方の態度 |

(3)読む

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | • 多様な資料を音声的な特徴に留意して音読することは、自然な話し方に役立つ。  • 多様な資料を読み、主題や意味を理解することは、読解力の養成の基礎となる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | • ひらがなとカタかなと, 漢字(音読み・訓読み)  カテゴリー  区分  • 音声的な特徴（清音・濁音、長音・短音、拗音、撥音など） |
| • 単語（基本的な意味と派生的な意味）  • 簡単な句（単語の組み合わせ関係、慣用表現）  • 簡単な文 |
| • 簡単な対話文  • 簡単な文書(SMS)、メール、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)招待状、メモ、ポスター、漫画、看板、標識、図表、日記、案内文、広告文、説明文、紹介文) |
| 課程・機能 | • 声に出して読む  • 単語、句、文章の意味を理解する  • キーワードや大意を理解したり類推する  • 細かい内容の理解  • デジタルテキストを読み、理解する |
| 価値・態度 | • 読む資料に対しての興味  • 多様な観点と意見に対しての共感と受け入れ  • 他人の経験と意見の尊重 |

(4)書く

カテゴリー

区分

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | • 単語や学習用漢字、簡単な文章を正しく書くことが文章を書く基本である。  • 対話文や文章の状況と目的を考慮した文法に合わせて書くことは正確なコミュニケーションの為に必要。  • 地位や親密度などを考慮し、相手を配慮しながら文章を書くことが必要。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | • ひらがな、カタかなと、学習用漢字  • 現代かなづかい  • 現代日本語文法 |
| • 単語（基本・派生の意味）  • 簡単な句（単語の結合関係、慣用的表現）  • 簡単な文章 |
| • 簡単な対話文  • 簡単な文書（SMS、メール、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)、招待状、メモ、ポスター、漫画、看板、標識、図表、日記、案内文、広告文、説明文、紹介文など） |
| 課程・機能 | • 学習用漢字を正しく書く  • 表記法に従って書く  • 文法に従って書く  • 状況や目的に合わせて書く  • 地位や親密度、言語文化などの違いを考慮して書く |
| 価値・態度 | • 文を書くことに対しての興味と自信  • 地位や親密度などによって相手を配慮 |

(5)文化

カテゴリー

区分

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | • 日本文化に対する理解は円滑なコミュニケーションの基盤となり、文化的な感受性を育む基礎となる。  • 相互文化的な観点から日本文化を理解することは、日本を理解し、日本との交流に役立つ。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | • 言語文化（依頼方法、承諾・断る方法、敬語法、呼称の呼び方、表現的特徴など）  • 非言語文化（身振りや手振りなど）  • 日本の簡単な概観（行政区域、地理、人口、気候など）  • 日常生活文化（家庭生活、学校生活、社会生活、交通および通信、衣食住、年中行事、スポーツ、まつり、幸運・祈願、環境など）  • 大衆文化（歌、漫画、アニメーション、ドラマ、映画など）  • その他（観光名所、主要人物など） |
| 課程・機能 | • 文化の内容を理解し、直接経験する  • 文化の内容を調査・整理し、コンテンツを制作する  • 文化の内容をコミュニケーションの状況で活用する  • メディアを活用して文化の内容や情報をオンラインで伝達・共有すること |
| 価値・態度 | • 日本文化に対する好奇心  • 日本文化の多様性に対する認識と包容  • 相互文化的な観点の認知 |

イ．達成基準

(1)聞く

|  |
| --- |
| [12日本語01-01] 音声的な特徴に留意して聞き、文字や単語を識別する。  [12日本語01-02] 単語、簡単な句や文章を聞いて、意味や内容を理解する。  [12日本語01-03] 日常生活に関連した簡単な文章や対話を聞いて、キーワードや意味を理解したり、類推する。  [12日本語01-04] 簡単な文章や対話をよく聞き、適切に対応する。 |

(ア)達成基準の解説

• [12日本語01-01] この達成基準は、清音･濁音、長音･短音、拗音、促音、撥音、拍、イントネーションなど、発音上の特徴に留意しながら聞いた文章と単語を識別することを意味する。

• [12日本語01-04] この達成基準は、コミュニケーション表現を活用した簡単な文章や対話を聞いて、状況に合わせて身振り、手振りなどで表現したり、内容と適切な絵、単語カード、チェックリストなどを選ぶことを言う。

(イ)達成基準適用時の注意事項

• 促音と撥音については、細かい指導よりも拍の数を区別して聞くことができるようにする。

• 日常生活や学習に必要な基本的な聞く能力と態度を身につけるために、学習者の生活周辺の慣れ親しんだテーマを基にした聞く活動が行われるようにする。

(2)話す

|  |
| --- |
| [12日本語02-01] 音声的な特徴に留意しながら単語、簡単な句や文章を話す。  [12日本語02-02] 簡単な句や文章を使って自分の考えや感想を話す。  [12日本語02-03] 状況に合わせて簡単なコミュニケーション表現を使って話す。  [12日本語02-04] 地位や親密度を考慮し、言語文化の違いを尊重して状況に合わせて話す。  [12日本語02-05] 相手の話を尊重し、対話に積極的に対話に参加する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本語02-01] この達成基準は、清音･濁音、長音･短音、拗音、促音、撥音、拍、イントネーションなど、発音上の特徴に留意しながら単語、簡単な句や文章を話すことを意味する。

(イ)達成基準適用時の注意事項

• 促音や撥音は細かく指導するよりも、拍の数を区別して話すことができるようにする。

• 話す活動のために主題を選ぶ際は学習者の立場を考慮しながら、様々な社会・文化的な素材を活用して多様性を経験できるように指導する。

• 学習者の話す活動で間違えた場合、コミュニケーションに支障をきたすことがない限り、その場で修正するのではなく、学習者が自信を持って話すことができるようにする。

• 日本人の言語文化の習慣に合わせて指導する。例えば、毎日会う友達同士では「こんにちは」や「さようなら」とは言わず、勧誘に対する断りの後には「ぜひ、またさそってください」と言うなど、日本人の言語文化の習慣を反映して指導する。

• 学習者間のコミュニケーションの際、基本的な対話の礼儀を守るように指導する。相手を配慮し、積極的に対話に参加する態度を身につけるようにする。

1. 読む

[12日本語02-01] 音声的な特徴にしながら単語や簡単な句や文を読む。

[12日本語02-02] 単語、簡単な句や文章を読んで意味を理解する。

[12日本語02-03] 簡単な文や対話文を読み、大意や詳細を把握したり推論する。

[12日本語02-04] 簡単なデジタルテキストを読み、主となる情報を理解する。

(ア)達成基準の解説

• [12日本語03-01] この達成基準は、清音･濁音、長音･短音、拗音、摩擦音、撥音、拍、イントネーションなどの発音上の特徴に留意し、単語や漢字、簡単な句や文章を声に出して読むことを意味する。

• [12日本語03-04] この達成基準は、スマートフォンやコンピューターなどのデジタルメディアを基に作成された簡単なSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)、ウェブ文書などの文章を読み理解することを意味する。

(イ)達成基準適用時の注意事項

• 促音や撥音を細かく指導するよりも、拍の数を区別して読むことができるように指導する。

• 学習者の認知レベルや言語使用能力を考慮し、読む資料の種類を多様化し、学習者が日常で接することができるメディアを幅広く活用して読む活動に興味を持たせるようにする。

(4)書く

|  |
| --- |
| [12日本語04-01] かなと学習用漢字、単語を正確に書く。  [12日本語04-02] 簡単な句や文を表記法や文法に合わせて書く。  [12日本語04-03] 簡単な対話文や文章を状況と目的に合わせて作成する。  [12日本語04-04] 地位や親密度、言語文化的な違いを考慮して簡単な文章を形式に合わせて作成する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本語04-01] この達成基準は、かなと基本語彙表で提示された学習用漢字と単語を正しく使うことを意味する。

• [12日本語04-02] この達成基準は、日本の『現代かなづかい』、常用漢字、送り仮名の付け方などの表記法規定や、『日本語文法事典』、『新版日本語教育事典』、『現代日本語文法』などの文法規定に合わせて書くことを意味する。

• [12日本語04-04] この達成基準は、SMS、メール、年賀状、ハガキ、招待状などの簡単な文章や対話を、地位や親密度などの違いを考慮して丁寧体や普通体で形式に合わせて書くことを言う。

1. 達成基準適用時の注意事項

• 学習者の個別学習レベルとペースを考慮し、単語を使った簡単な活動から文法に合った文章を完成させる活動まで、レベル別の課題を提供するようにする。

• 学習者の直接的な経験や日常生活に関連する問題など、学習者の日常生活と関連する内容を素材として活用し、文章作成に対する興味を持ち、書く活動に積極的に参加するようにする。

• 学習者の達成レベルを考慮し、辞書や翻訳機などの補助ツールを利用して、学習者が自信を持って書くことができるようにする。

(5)文化

|  |
| --- |
| [12日本語05-01] 日本文化の内容を理解する。  [12日本語05-02] 日本文化の内容を調査・整理し、多様なコンテンツを制作する。  [12日本語05-03] 日本文化の内容を相互文化的な観点からオンラインで意見を共有する。  [12日本語05-04] 言語文化や非言語文化を含む日本文化の内容をコミュニケーションの場面で活用する。  [12日本語05-05] 日本文化に対する好奇心を持ち、授業や課題活動に積極的に参加する。 |

(ア)達成基準の解説

• [12日本語05-01/02/03/04] この達成基準における「日本文化内容」は、ア.内容体系で提示された(5)文化の領域の「知識・理解」のカテゴリーに属する「内容要素」を言う。

• [12日本語05-02] この達成基準は、日本文化に関する調査･整理をした、内容を基に報告書、パンフレット、ポスター、映像などの様々なコンテンツを作成することを意味する。

• [12日本語05-03] この達成基準は、文化の多様性と相違点を認識し、韓国人と日本人が目指す価値などをお互いに理解し、尊重しながら日本文化について調査･整理した内容をオンラインで発表･討論し、資料や意見を共有することを言う。

• [12日本語05-04] この達成基準は、コミュニケーションの状況で日本人の言語文化･非言語文化を活用し、日常生活文化や伝統文化などの文化内容を素材で扱うことを言う。日本語の言語文化の特徴としては、依頼方法、承諾･断る方法、呼称方法、ほめる方法、表現の特徴などが挙げられる。表現の特徴の例としては、慣用的表現（顔が広い、となりの花は赤いなど）、結婚式で慎む言葉（切る、別れる、戻るなど）、病院で慎む言葉（お元気ですか、さようならなど）、別れ際に用いる様々な表現（さようなら、お気をつけて、お元気でなど）、韓国語と表現方法が違うもの（あれこれ、行ったり来たり、もう一度など）などがある。非言語文化の特徴としては、 自身を指で指す際に人差し指で自分の鼻を指したり、食前食後に両手を合わせる動作などが挙げられる。

(イ) 達成基準適用時の注意事項

• 学習者のレベルを考慮し、韓国語で遂行することができる。

• 発表や討論の内容を構成する過程で、多様なメディアを通じて、主題や目的に合う資料を検索･収集し、整理する活動を経験できるようにし、日韓文化の共通点や相違点を理解し、発表することができるようにする。

• 学習者が多様なメディアを活用し日本文化内容を調査し説明する際には、信頼性のある機関の情報を活用できるように案内し、情報に対する引用を残せるように指導する。

• 資料をオンラインで共有する際には、著作権が侵害されないように留意する。

３．教授・学習及び評価

ア．教授・学習

(1)教授・学習の方向性

(ア)言語の4機能(聞く・話す・読む・書く)を有機的に統合し、教授・学習するようにする。

(イ)学習者の能動的な学習活動が行われるようにする。教授・学習活動の設計時には、学習者の日本語使用能力、学習タイプ、学習戦略などを考慮し、学習者中心の授業活動を構成し、学習者が課題達成のために必要な学習プロセスと戦略を取捨選択できるようにし、自己主導的学習が行えるようにする。

(ウ)学習者の特性と達成段階を考慮し、個別化された授業が行われるようにする。個別の学習者の日本語能力レベルおよび多様な学習者要素を把握できるデータを収集し、各自のレベルと要求に一致する資料、活動、課題の選択を可能にするなど、個別化された学習環境を提供する。

(エ)多様なデジタル教授・学習ツールを積極的に活用して指導する。各種言語補助学習ツールを活用できる課題を与え、学習者の能動的な参加と相互作用を促し、学習者が活気ある日本語学習を経験できるようにする。

(オ) 授業環境や日本語学習の内容に合わせて、多様なオンライン・オフラインの連携学習を設計する。オンライン会議システムやメタバースなどのリアルタイムな双方向プラットフォームを活用し、学習者が積極的に参加できるようにする。

(カ)意思疎通の基本表現を活用し、主題や状況ごとに実生活と慣れ親しんだ日本語コミュニケーション環境を作り出し、学習した言語・文化的知識を実際の文脈で適用し体験できるように指導する。

(キ)相互コミュニケーションと、協力をすることで課題を解決する経験して、これにより他人への配慮、共同体の価値観と共に、自己主導性、問題解決能力、創造性を育成するよるようにする。

(ク)日本文化学習を通じて文化の普遍性および多様性を理解し、相互文化的な観点から日韓文化を比較し、発表・討論させることによって多様な価値を尊重する包要的な民主市民としての態度を身につけられるように指導する。

(2)教授・学習方法

(ア)文字や単語よりも表現に重点を置いた教授･学習活動を行うようにする。

(イ)意思疎通の基本表現を理解し、主題および状況別学習活動を展開できるようにする。仕事や旅行計画、アンケートなどの多様な主題と状況別の内容を聞いてチェックリストの完成、空欄の穴埋め、インタビュー、ロールプレイ、主要となる内容の把握など、学習者のレベルに合う活動をするようにする。

(ウ)音声ソフトウェアなどを利用し、イントネーションに合わせて話すようにする。日本人と自分のイントネーションを比較し、繰り返し話す練習を通じて自然なイントネーションに慣れるようにする。

(エ)絵、写真、メニュー表、図表、標識、略図、路線図などを利用して簡単な文章や対話を聞いて情報を調べたり、状況を説明するようにする。

(オ)日常生活で慣れ親しんだ案内放送、広告、ポスターなどを読み、主要となる内容を理解し、対話したり使えるようにする。

(カ)簡単なSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス(SNS)、ウェブ文書などのデジタルテキストの主な情報を理解し、主要となる内容を話したり日本語で入力できるようにする。

(キ)デジタルメディア、仮名連想カード、映像教本資料などを活用して濁音･清音、長音･短音、拗音、促音、撥音、拍、イントネーションなどを区別し、仮名や漢字を正しく読み、書くようにする。

(ク)歌、プレゼンテーション、教材などのメディアを利用して単語や動詞･形容詞などの活用形を中心に学習し、文法に合わせて書くことができるようにする。

(ケ)呼称、清聴などが使われた簡単な文章や対話文、映像資料などを活用して立場や親密度などを区別し、状況に合わせた話しができるようにし、招待状やハガキなどの簡単な文章を作成できるようにする。

(コ)デジタルデータやオンライン検索などを活用して、お礼、断り、依頼などの日本人の言語文化や身振り、手振りなどの非言語文化を理解し、言語文化や非言語文化の特徴に合った表現ができるようにする。

(サ)日本文化の内容を日本語コミュニケーションに有機的に活用できるようにする。

(シ)多様な実物・視覚・デジタルデータを提供することで、日本文化の内容を理解し、生き生きとした直接的な文化体験をすることができるようにする。

(ス)日本語学習に対する持続的な動機付けと興味喚起のために、ロールプレイ、クイズ、ゲーム、歌などを活用し学習者中心の教授･学習活動が行われるようにする。

(セ)教師と学習者、学習者間の活発な相互作用を促す協同・協力学習、問題解決学習、小グループ活動（ペア・グループ・メンター活動など）、タスク中心の活動などの教授･学習方法を適切に活用する。

(ソ)絵、写真、映像などの創作物を作り、それをブログやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を活用して共有したり、学習者間で発表･討論することでコミュニケーションできるようにする。

(タ)ビッグデータや人工知能を活用して、日韓文化の変遷などを検討し、将来の社会を予測して議論できるようにする。

(チ)デジタルベースの学習者中心の授業を設計し、それを拡大して学習者のデジタルリテラシーを高め、日本語学習に適したメディアの活用方法を身につけさせる。

(ツ)教育情報技術を活用したオンライン・オフライン連係型の授業モデルを開発し、生徒別の学習データを利用して学習者のレベルに合わせた段階別な課題を提示し、フィードバックを通じて効率的な学習を実現する。

(テ)スマートフォン、タブレット、コンピューターなどのデジタルメディアを活用して、学習者のレベル、特性、状況に応じた活動や課題を遂行することで、自律的な学習が行われるようにする。

(ト)最低達成水準を保証するため、日本語学習のレベルと個人の特性に考慮し個別化された学習活動や協力型のグループ活動をできるようにする。これにより、学習者の日本語学習の興味とモチベーションを高め、学習者が自己主導的に学習できるようにする。

イ．評価

(1)評価方向

(ア)日常生活に関連した日本語の活用能力と能力重視の評価を行うようにする。コミュニケーョン表現を中心に断片的で重要でない知識の評価を控え、思考啓発を促進することで最終的に日本語活用能力が伸びたかどうかに焦点を当てて評価する。

(イ)学習者の統合的な日本語能力を育成するため、聞く、話す、読む、書くの個別の言語機能に対しての評価ではなく、二つ以上の機能を統合した評価に焦点を当てる。

(ウ)日常生活の中で実際と同様の状況と文脈を提供し、学習したコミュニケーション表現を活用および応用できるかどうかを評価するが、学習活動の性格に合わせて流暢さと正確性の比重を弾力的に調節するようにする。

(エ)学習者が評価を学習課程の一部として認識し、自身の学習課程と成果を振り返ることができるように評価を計画する。評価は学習の最終段階で成果を測定する行為を超えて、学習者が自身の学習の課程を振り返り、学習計画を自己主導的に修正・補完できるようにする。

(オ)学習者の多様な特性や日本語レベルに考慮し個別化された評価を実施する。学習者の学習スタイル、定義的な特性、日本語レベルなどを考慮し、多様な評価方法を用意し学習者に合わせた評価を行われるようにする。特に、学習不振を経験したり成長速度が遅い学習者が単一評価方法によって学習意欲が低下しないように、多様な様式の評価案を設ける。

(カ)様々なデジタル評価ツールを積極的に活用する。デジタル分析・評価ツールを活用し、実践的な評価文脈を提供し、多様な学習者データを体系的に構築する。オンライン・オフラインのプラットフォームの特性を活かして、言語機能や文化理解のレベルをバランスよく評価するように計画する。

(キ) 教師は評価結果を継続的にモニタリングし、教授・学習を振り返り、評価改善に活用する。学習者には評価結果に基づいて個別化されたフィードバックを提供する。

(2)評価方法

(ア)総合的な言語機能に対する評価は、教授・学習過程で総合的な課題を実施しながら、協同学習課程と学習者中心の自己主導的学習能力を含めて評価する。

(イ)ロールプレイ、クイズ、インタビューなどを活用して、基本語彙と意思疎通の基本表現を中心に、日常生活に関連した基礎的な日本語を理解し表現する言語活動能力を評価する。

(ウ)絵、写真、メニュー表、図表、看板板、略図、路線図などを利用して、日常生活の実際に似た状況や文脈を提供し、コミュニケーション表現を応用して対話したり状況を説明したりする能力を評価する。

(エ)日課や旅行計画、アンケートなどの多様な主題やシチュエーションの内容を聞き、チェックリストの完成や空欄の穴埋め、中心となるの確認などの活動を通じて、意思疎通の基本表現を理解できるかを評価する。

(オ)日常生活で馴染みのある簡単な案内放送、広告、ポスターなどを読み、中心となるを理解し対話したり書くことができるかを評価する。

(カ)簡単なSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブ文書などのデジタルテキストの主要となる情報を理解し、中心となるを話したり日本語で入力できるかを評価する。

(キ)課程を重視する評価の目的に合わせて、授業中にデジタルメディアを活用した制作活動は実施評価に活用するが、内容や表現の正確性などを自ら点検できる多様なウェブサイトやアプリケーションを活用できるように案内し、韓国語で発表・討論できるなど学習者のレベルによって評価する。

(ク)日本文化を調査し、絵や写真、映像を活用した創作物を作成し、ブログやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）などのメディアを利用して共有したり発表・討論できるかを評価する。

(ケ)多様な形式の形成的評価や実施評価において、教師と学習者が使い慣れたオンラインプラットフォームや学習機能アプリケーションなどのデジタル評価ツールを活用して効果的かつ効率的に評価する。

(コ)文化に関する評価は、基礎的な知識だけでなく、コミュニケーションに関連する文化内容を理解しているかを評価する。

(サ)評価計画作成時に、達成基準に基づく最低達成水準を設定し、教授・学習活動と連携して最低達成水準を保証するための指導と評価が行われるようにする。

(シ) 学習者の日本語学習レベルと個別の特性に合わせて、レベルごとの学習課題を割り当てて最低達成水準を保証し、それに対する自己主導学習能力や協力的なグループ活動での遂行役割能力、協働能力、貢献度などを教師の観察評価、自己評価、生徒相互評価など多様な方法で評価する。

深化日本語

1. 性格及び目標
2. 性格

今日の私たちの社会は、情報通信技術、ビッグデータ、人工知能などを活用した第4次産業革命により、超知能・超連結社会へと移行している。今や、社会は相互コミュニケーションと協働を通じた集団知能が切実に必要となった。それに伴い、学校でも知識教育より人格形成の教育を重視し、さらには世界を包括する共同体的な価値観と創造性・包容性を備えた自己主導的な人材育成の必要性が強調されるようになった。

外国語は、世界に出ていくための開かれた窓として隣人とコミュニケーションをとり、共同体の一員として生きる上で不可欠なツールである。これにより異なる文化圏で生活する人々の考え方や文化を理解し、共有することができる。したがって、外国語教科は国家の歴史と文化理解を基盤として相互協力する世界市民を育成する必須教科だと言える。

地理的にも近い韓国と日本は、古代から言語や文化などの様々な面で互いに影響を与え合い、発展してきた。これらの関係は今日まで続いている。特に急速に変化するグローバライゼーションの流れの中で、政治、経済、外交などの多様な面で、韓国と日本は相互理解と協力が求められる状況に置かれている。このような時代に日本語学習は、日本人と直接コミュニケーションをとり、日本文化や情報を正しく理解するきっかけとなり、誤解や偏見のない協力関係を築いていく重要な礎となるだろう。

「深化日本語」は進路選択科目として、一般選択科目である「日本語」で習得した基礎的な日本語コミュニケーション能力を拡張･深化させる教科だ。 言語的な側面では、日常生活の基本表現を中心にコミュニケーション能力を深化させ、読み書き能力の向上により重点を置く。文化的な側面では、多様なメディアを活用して情報を収集し、相互文化的な視点から日本文化を広く理解することを目指す。学習者は「深化日本語」の学習を通じて、日本語を初めて学ぶ学習者が日常生活に関連する基本的な表現を学ぶことで、日本社会と文化に対する理解の幅を広げ、コミュニケーションして交流を深めることで、世界市民として成長するための能力をさらに育成させることができるであろう。

イ．目標

日常生活で必要なコミュニケーション能力を向上させ、特に「読み書き」の能力を深化させ、日本文化に対するより深い理解を基に、相互文化的な視点から日本人と交流できる能力を育む。具体的な目標は以下の通りである。

(1) 意思疎通の基本表現を多様な目的に合わせて表現し、コミュニケーションを取る。

(2) 日常生活に関連した資料を読み、理解し、多様な様式の文章を書く。

(3) 相互文化的な視点から日本文化をより広く理解し、日本人と情報を交換･コミュニケーション取ることにより、世界市民として成長する。

(4) メディアを活用して、様々な知識や情報を収集し、自分の生活と進路選択に活用する。

1. 内容体系及び達成基準
2. 内容体系

|  |
| --- |
| ※ 文章構成は以下に示された『言語材料』に基づく。  ※ 文法は日本で刊行された『日本語文法事典（日本語文法学会編）』、『新版日本語教育事典（日本語教育学会編）』、『現代日本語文法（日本語記述文法研究会編）』などの内容を参考にする。  • **発音および文字**: 日本語の標準発音と現代かなづかいなどの日本の文字表記に従う。  • **語彙**: [別表Ⅰ]に示された基本語彙を中心に、約900語程度の単語を用いることを推奨する。  • **文法**: [別表Ⅰ]に示された文法要素および[別表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]の文法内容を参考にするが、必要に合わせて追加の文法事項も取り扱うことがある。  • **コミュニケーション表現**: [別表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]を中心に取り扱うが、必要に合わせて深化させることもある。 |

1. 聞く

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | ・多様な様式の資料を聞いて意味を理解することが聞くことの基本だ。  ・多様な目的を持つ文章や対話を聞いて内容を把握したり、類推することは聴解力向上に役立つ。  ・相手の言葉を清聴し、尊重する態度は円滑なコミュニケーションの基盤となる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解  カテゴリー  区分 | ・音声的な特徴 |
| ・単語（基本的な意味や派生的な意味）  ・句（単語の結合関係、慣用表現）  ・やや長い文 |
| ・挨拶・自己紹介（出会い・別れ、外出・帰宅、訪問、食事、年末、新年、お祝い、自己紹介、他人紹介、家族紹介など）  ・配慮・意思伝達（感謝、謝罪、ほめ、激励・励まし、断り・辞退、謙遜、遺憾、苦情、承諾・同意、希望・意志、目的、意見提示、訂正・否定など）  ・情報交換（存在・場所、時間・時、選択、比較、方法・理由、状態、趣味・関心、能力・可能、経験、確認、案内、推測、陳述、状況説明など）  ・行為要求（依頼・指示、禁止、勧誘、助言・提案、許可、警告など）  ・対話の進行（ためらい、相槌、感嘆、声かけ、聞き返し、話題展開・転換など） |
| 課程・機能 | ・句・文章の意味を理解する  ・適切に反応する  ・意図や主題を理解したり推測したりする  ・細かい内容を理解する  ・地位や親密度などの違いを区別する |
| 価値・態度 | ・内容に興味を持ち、積極的に参加する態度  ・相手の言葉に対する尊重と傾聴  ・多様な観点や意見に対する批判と受け入れ |

(2)話す

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | ・明確な意思伝達のためには、音声的な特徴に留意して話すことが重要だ。  ・様々な表現を状況に合わせて話すことは、コミュニケーションにおいて重要な要素だ。  ・言語文化に基づいて相手を配慮し話すことは、円滑なコミュニケーションにつながる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解  カテゴリー  区分 | ・音声的な特徴 |
| ・単語（基本的･派生的な意味）  ・句（単語の結合関係、慣用的な表現）  ・やや長い文 |
| • 挨拶･自己紹介（出会い･別れ、外出･帰宅、訪問、食事、年末、新年、祝い、自己紹介、他人紹介、家族紹介など）  • 配慮･意思伝達（感謝、謝罪、ほめ、励まし、断り･辞退、謙虚、遺憾、苦情、承諾･同意、希望･意志、目的、意見提示、訂正･否定など）  • 情報交換（存在･場所、時間･時刻、選択、比較、方法･理由、状態、趣味･関心、能力･可能、経験、確認、案内、推測、陳述、状況説明など）  • 行為要求（依頼･指示、禁止、勧誘、助言･提案、許可、警告など）  • 対話の進行（ためらい、受け答え、感嘆、話しかける、追加質問、話題展開･転換など）  • 言語文化（依頼方法、承諾･断り方法、呼び方、表現的特徴など）  • 非言語文化（ジェスチャー、ボディランゲージなど） |
| 過程・機能 | • 音声的な特徴に留意して話す  • 説明したり意思を表現する  • 状況に合わせて話す  • 地位や親密度、言語文化の違いを理解し表現する |
| 価値・態度 | • 言語文化的な違いに対する配慮と相手の尊重  • 他人との相互作用時の協力的なコミュニケーション  • 相手の話に共感し受け入れる態度  • 積極的に話す態度 |

(3)読む

カテゴリー

区分

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | ・多様な様式の資料を音読することは、自然な話し方を助ける。  ・多様な様式の資料を読み、主題や意味を理解することは、読解力の向上の基盤となる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | ・音声的な特徴  ・漢字（音読み･訓読み） |
| ・単語（基本的･派生的な意味）  ・句（単語の結合関係、慣用的な表現）  ・やや長い文 |
| ・やや長い対話文  ・やや長いテキスト（SMS、メール、SNS、招待状、メモ、ポスター、漫画、看板、表示板、描写、図表、日記、案内文、広告文、説明文、紹介文など）  ・多様な書式など |
| 過程・機能 | ・声に出して読むこと  ・大意や主題を理解したり類推すること  ・細かい内容の理解  ・地位や親密度、言語文化などの違いの理解  ・デジタルテキストを読んで理解すること |
| 価値・態度 | ・読み物に対する集中と興味  ・多様な観点や意見に対する批判と受け入れ  ・資料を通じた理解と共感  ・他人の経験と意見の尊重 |

(4)書く

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | ・文章や対話文を文法に合わせて書くことは、正確なコミュニケーションのために必要だ。  ・文章や対話文を状況や目的に合わせて書くことは、文章力向上に役に立つ。  ・地位や親密度などを考慮し、相手を配慮して文章を書くことが必要である。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解  カテゴリー  区分 | ・漢字  ・現代仮名遣い  ・現代日本語文法 |
| ・単語（基本的･派生的な意味）  ・句（単語の組み合わせ関係、慣用表現）  ・やや長い文 |
| ・やや長い対話文  ・やや長いテキスト（テキストメッセージ、メール、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、招待状、メモ、ポスター、漫画、看板、標識、記述、図表、日記、案内文、広告文、説明文、紹介文など）  ・各種フォーマットなど |
| 過程・機能 | ・表記法に合わせて書く  ・状況と文法に合わせて書く  ・目的と文法に合わせて書く  ・主題と形式に合わせて書く  ・地位や親密度、言語文化の違いを考慮して文章を作成する |
| 価値・態度 | ・地位や親密度に応じた相手への配慮  ・言語文化の違いへの配慮と相手の尊重  ・文章を書く方法と態度の改善 |

(5)文化

カテゴリー

区分

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | ・多様な日本文化を理解することは円滑なコミュニケーションの基盤となり、文化的な感受性を育む土台となる。  ・相互文化的な観点から日本文化を理解することは、日本を理解し、日本と交流するのに役立つ。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解 | ・言語文化（依頼方法、受諾・断りの方法、敬語、呼び方、表現の特徴など）  ・非言語文化（身振り、手振りなど）  ・日本の簡単な概観（行政区域、地理、人口、気候など）  ・日常生活の文化（家庭生活、学校生活、社会生活、交通や通信、食文化、年中行事、スポーツ、祭り、縁起、環境など）  ・伝統文化（歌、漫画、アニメーション、ドラマ、映画など）  ・その他（観光名所、主要人物など） |
| 過程・機能 | ・文化の内容を理解し、直接または間接的に経験する  ・文化の内容を調査・整理してコンテンツを制作する  ・文化の内容をコミュニケーションの場面で活用する  ・メディアを活用して文化の内容や情報をオンライン・オフラインで伝達・共有 |
| 価値・態度 | ・日本文化への好奇心  ・日本文化の多様性に対しての認識と包容性  ・相互文化的な観点の認識 |

1. 達成基準
2. 聞く

|  |
| --- |
| [12深化日本語01-01] 音声的な特徴に留意しながら、やや長い文章を聞いて意味を理解する。  [12深化日本語01-02] 日常生活と関連するやや長い文章や対話を聞いて、大意の主体を  理解したり、類推したりする。  [12深化日本語01-03] やや長い文章や対話を聞いて細かい内容を理解する  [12深化日本語01-04] やや長い文章や対話を清聴し、適切に反応する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本語01-01]この達成基準は清音・濁音、長音・短音、拗音、促音、撥音、拍、イントネーションなど、発音上の特徴に留意しながら句や、やや長い文章を聞いて意味を理解することを言う。

• [12日本語01-04]この達成基準はコミュニケーション表現を活用したやや長い文章や対話を聞いて状況に合わせた身振り手振りなどで表現したり、内容と適切な絵、単語カード、チェックリストなどを選択することを言う。

1. 達成基準適用時の注意事項

• 日常生活や学習に必要な基本的な聞き取りと、態度を身につけることができるように、学習者の生活の中で慣れ親しんだテーマを基にした活動を行うようにする。

1. 話す

|  |
| --- |
| [12深化日本語02-01] 発音の特徴に留意しながら単語や短い文を話す。  [12深化日本語02-02] 短い文やフレーズを使って自分の考えや感情を表現する。  [12深化日本語02-03] 意思疎通の基本表現を活用して、状況に合わせて話す。  [12深化日本語02-04] 地位や親密度を考慮し、言語文化の違いを尊重し、状況に応じた話し方をする。  [12深化日本語02-05] 相手の話を尊重し、積極的に対話に参加する。 |

1. 達成基準の解説

・[12日本語02-01] この達成基準は、清音･濁音、長音･短音、拗音、摩擦音、撥音、拍、イントネーションなどの発音上の特徴に留意しながら、句ややや長い文章を話すことを意味する。

(イ)達成基準適用時の注意事項

• 話す活動のためのテーマを選ぶ際には、学習者の立場を考慮しつつも、多様な社会的･文化的な素材を活用し、多様性を体験できるように指導する。

• 学習者の話す活動で生じる間違いは、コミュニケーションに支障を与えない場合はその場に修正するよりは、学習者が自信を持って話せるようにする。

• 日本人の言語文化習慣に合わせて指導する。例えば、勧誘に対する断りをした後には「ぜひ、また誘ってください」とするなど、日本人の言語文化習慣を反映して指導する。

• 学習者間のコミュニケーションの際、基本的な対話の礼儀を守るように指導する。相手を配慮し、清聴し、積極的に対話に参加する態度を持てるようにする。

1. 読む

|  |
| --- |
| [12深化日本語03-01] 音声的な特徴に留意しながらやや長い文章や対話文を声に出して  読む。  [12深化日本語03-02] やや長い文章や対話文を読み、細かい内容を理解したり、  類推する。  [12深化日本語03-03] やや長いデジタルテキストを積極的に探し読み、重要な情報を理解する。  [12深化日本語03-04] やや長い文章や対話文を読み、地位や親密度、言語文化的な違いを理解する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本語03-01] この達成基準は、清音・濁音、長音・短音、拗音、促音、発音、拍、イントネーションなどの発音上の特徴に留意しながら、やや長い文章や対話文を、声に出して読むことを意味する。

• [12日本語03-04] この達成基準は、スマートフォン、コンピューターなどのデジタルメディアを基に作成したやや長いSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブ文書などを読み、理解することを意味する。

1. 達成基準適用時の注意事項

• 学習者の認知的なレベルや言語使用能力を考慮し、読む資料の種類を多様化し、学習者が日常で接することのできるメディアを広く活用して読む活動に興味を持たせる。

(4)書く

|  |
| --- |
| • [12深化日本語04-01] 表記法に留意して、学習用の漢字を含んだやや長い文章を正確に書く。  • [12深化日本語04-02] やや長い対話文を状況と文法に合わせて作成する。  • [12深化日本語04-03] やや長い文章や書式を目的と文法に合わせて作成する。  • [12深化日本語04-04] 地位や親密度、言語文化的な違いなどを考慮して、やや長い文章　を主題と形式に合わせて作成する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本語04-01] この達成目標は、かなと基本語彙表で提供された学習用漢字が含まれたやや長い文を正確に書くことができることを意味する。表記法は日本の『現代かなづかい』、『常用漢字』、『送り仮名の付け方』などの規定に合わせる。

• [12日本語04-02] この達成基準は、『日本語文法事典』、『新版日本語教育事典』、『現代日本語文法』などの文法規定に合わせて書くことを意味する。

• [12日本語04-04] この達成基準は、SMS、メール、手紙、はがき、招待状などのやや長い文章や対話を、地位や親密度などの違いを考慮して丁寧体や普通体で主題や形式に合わせて作成することを意味する。

1. 達成基準適用時の注意事項

• 学習者の個別の学習レベルとスピードを考慮し、単純な活動から漢字を含んだやや長い文を完成させる活動まで、レベルに応じた課題を提供する。

• 学習者の直接的な経験や日常生活に関連する問題など、学習者の日常生活に密接に関わる内容を活用し、学習者が文章を書くことに興味を持ち、積極的に参加するようにする。

• 学習者の達成レベルを考慮し、辞書や翻訳機などの補助ツールを活用して、学習者が自信を持って書くことができるようにする。

(5)文化

|  |
| --- |
| [12深化日本語05-01] 日本文化の内容を理解する。  [12深化日本語05-02] 日本文化の内容を調査・整理し、多様なコンテンツを制作する。  [12深化日本語05-03] 日本文化の内容を相互文化的な観点からオン・オンラインで意見を  共有する。  [12深化日本語05-04] 言語文化・非言語文化を含む日本文化に関する内容をコミュニケーションの状況で活用する。  [12深化日本語05-05] この達成基準は、日本文化に対して好奇心を持ち、授業や課題活動に  積極的に参加することを意味する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本語05-01/02/03/04] この達成基準における「日本文化内容」とは、ア. 内容体系で掲示された(5) 文化領域の「知識･理解」のカテゴリーに属する「内容要素」を言う。

• [12日本語05-02] この達成基準は、日本文化に対して調査･整理した内容を基に、報告書、パンフレット、ポスター、映像などの多様なコンテンツを制作することを意味する。

• [12日本語05-03] この達成基準は、文化の多様性と相違点を認識し、韓国人と日本人が求める価値観を相互理解し、、尊重しながら、日本文化に関する調査･整理した内容をオンライン･オフラインで発表･討論し、資料や意見を共有することを言う。

• [12日本語05-04] この達成基準は、コミュニケーションの状況で日本人の言語文化･非言語文化を活用し、日常生活文化や伝統文化などの文化内容を素材に扱うことを意味する。日本語の言語文化的特徴として、依頼方法、承諾･断る方法、称呼方法、ほめる方法、表現の特徴などが挙げられる。表現の特徴の例としては、慣用的な表現（顔が広い、となりの花は赤いなど）、結婚式で使われる慎む言葉（切る、別れる、戻るなど）、病院で慎む言葉（お元気ですか、さようならなど）、別れの際に使用される多様な表現（さようなら、お気をつけて、お元気でなど）、韓国語と異なる表現方法（あれこれ、行ったり来たり、もう一度など）がある。非言語文化の特徴としては、自身を指で指す際に人差し指で自分の鼻を指したり、食前食後に両手を合わせる動作などが挙げられる。

1. 達成基準適用時の注意事項

• 学習者のレベルを考慮して、韓国語で遂行することもできる。

• 発表や討論の内容を構成する過程で、多様なメディアを通じて主題や目的に合った情報を検索･収集し整理する活動を経験できるようにし、日韓文化の共通点と相違点を理解し発表できるようにする。

• 学習者が多様なメディアを活用して日本文化の内容を調査し説明する際には、信頼できる機関の情報を利用できるように案内し、情報に対して引用を残せるように指導する。

• オンラインで情報を共有する際には、著作権が侵害されないように留意する。

３．教授・学習及び評価

1. 教授・学習

(1)教授・学習の方向

(ア)言語の4機能（聞く、話す、読む、書く）を有機的に統合し、教授・学習するようにする。

(イ)学習者の能動的な学習活動が行われるようにする。教授・学習活動の設計時に、学習者の日本語使用能力、学習タイプや戦略などを考慮し、学習者中心の授業活動を構成し、学習者が課題目標達成のために必要な学習過程と戦略を選択できるようにし、自己主導的な学習が行われるようにする。

(ウ)学習者の特性と達成段階を考慮し、個別化された授業が行われるようにする。個別学習者の日本語能力レベルや様々な学習者要素を理解できるデータを収集し、それぞれのレベルと要求に適合する資料、活動、課題などを選択できるようにし、個別化された学習環境を提供する。

(エ)多様なデジタル教授・学習ツールを積極的に活用して指導する。各種言語補助学習ツールを活用できる課題を与え、学習者の能動的な参加と相互作用を促進し、学習者が生き生きとした日本語学習を経験できるようにする。

(オ) 授業環境や日本語学習の内容によって、多様なオンライン・オフラインの連携学習を設計する。オンライン会議システムやメタバースなどのリアルタイムな双方向プラットフォームを活用し、学習者が積極的に参加するようにする。

(カ)意思疎通の基本表現を活用し、主題および状況別で実生活に慣れ親しんだ日本語コミュニケーション環境を作り出し、学習した言語文化的知識を実際の文脈で応用・体験するように指導する。

(サ)相互コミュニケーションや協力を通じて課題を解決する経験をさせ、これにより他人への配慮や共同体の価値観と共に、自己の主体性、問題解決能力、創造性を育むようにする。

(シ)日本文化学習を通じて、文化の普遍性および多様性を理解し、相互文化的な観点から日韓の文化を比較し、発表・討論を通じて多様な価値を尊重する包括的な民主市民としての姿勢を身につけるように指導する。

(2) 教授･学習方法

(ア)文字や単語よりも表現に重点を置いて教授･学習活動が行われるようにする。

(イ)意思疎通の基本表現を理解し、主題および状況別に基づいた学習活動を展開できるようにする。仕事や旅行計画、アンケートなど、多様な主題や状況別の内容を聴いてチェックリストを完成させたり、インタビューをしたり、ロールプレイや中心的な内容の把握など、学習者のレベルに合う活動を行う。

(ウ)音声ソフトウェアなどを利用して、イントネーションに合わせて話すようにする。日本人と自分のイントネーションを比較し、繰り返し話す練習を通じて自然なイントネーションに慣れるようにする。

(エ)絵、写真、メニュー表、図表、標識、地図、路線図などを活用して、やや長い文章や対話を聞いて情報を見つけたり、状況を説明するようにする。

(オ)日常生活で慣れ親しんだ案内放送、広告、ポスターなどを読んで中心となるを理解し、対話したり書くことができるようにする。

(カ)歌、プレゼンテーション、教材などのメディアを利用して、単語や動詞・形容詞などの活用形を表現中心に学習し、文法に合わせて書くことができるようにする。

(キ)やや長いSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブ文書などのデジタルテキストの主要となる情報を理解し、中心となるを話したり日本語で入力できるようにする。

(ク)敬称、称呼などが使用されたやや長い文章や対話文、映像資料などを活用して、地位や親密度などを区別し、状況に合わせて話すことや招待状、ポストカードなどのやや長い文章を作成できるようにする。

(ケ)デジタルデータ、オンライン検索などを活用して、感謝、断り、依頼など日本人の言語文化や身振り手振りなどの非言語文化を理解し、言語文化・非言語文化の特徴に合わせて表現できるようにする。

(コ)日本文化の内容を日本語のコミュニケーション際に有機的に活用できるようにする。

(サ)多様な実物、視覚、デジタルデータを提供することで、日本文化内容を理解し、生き生きとした直接的な文化体験をすることができるようにする。

(シ)日本語学習に対する持続的な動機付けと興味喚起のために、ロールプレイ、クイズ、ゲーム、歌などを活用し、学習者中心の教授・学習活動が行われるようにする。

(ス)教師と学習者、学習者間の活発な相互作用を促進する協同・協力学習、問題解決学習や小グループ活動（ペア・グループ・メンター活動など）、タスク中心の活動などの教授・学習方法を適切に活用する。

(セ)絵、写真、映像などの創作物を作り、それをブログやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を利用して共有したり、学習者間でプレゼンテーションやディスカッションを行い、コミュニケーションを図ることができるようにする。

(ソ)ビッグデータや人工知能を活用して、日韓文化交流の変遷などを検証し、将来の社会を予測してディスカッションができるようにする。

(タ)デジタルベースの学習者中心の授業を設計し、これを拡大して学習者のデジタルリテラシーを高め、日本語学習に適したメディアの活用方法を習得する。

(チ)教育情報技術を活用したオンライン・オフライン連携型の授業モデルを開発し、生徒ごとの学習データを活用して学習者のレベルに合う段階的な課題を提示し、フィードバックを通じて効率的な学習を実現する。

(ツ)スマートフォン、タブレット、コンピューターなどのデジタルメディアを活用し、学習者のレベル、特性、状況に合わせて活動や課題を遂行させることで、自己主導的な学習が行われるようにする。

(テ)最低限の達成水準を保証するために、日本語学習のレベルと個人の特性に配慮した個別化された学習活動と協力型のグループ活動をできるようにする。これにより、学習者の日本語学習への興味とモチベーションを高め、学習者が自己主導的に学習できるようにする。

(イ) 評価

(1)評価方向

(ア)日常生活に関連する日本語の活用能力と力量中心に評価を行われるようにする。コミュニケーョン表現を中心に断片的で重要でない知識の評価を控え、思考啓発を促進することで最終的に日本語活用能力が伸びたかどうかに焦点を当てて評価する。

(イ)学習者の総合的な日本語能力を向上させるために、聞く、話す、読む、書くの個別の言語機能に対しての評価だけでなく、二つ以上の機能を統合した評価に焦点を置く

(ウ)日常生活の実際に似た状況と文脈を提供し、学習したコミュニケーション表現を活用および応用できるかを評価するが、学習活動の性格に合わせて流暢さと正確さの重みを柔軟に調整するようにする。

(エ)学習者が評価を学習課程の一部と認識し、自身の学習課程と成果を振り返るために、評価を計画する。評価は学習の最終段階で成果を測定する行為を超えて、学習者が自身の学習の過程を振り返り、学習計画を自己主導的に修正・補完できるようにする。

(オ)学習者の多様な特性や日本語レベルに応じた個別化された評価を実施する。学習者の学習スタイル、個々の特性、日本語レベルなどを考慮し、多様な評価方法を用意して学習者に合わせた評価が行われるようにする。特に、学習の遅れや成長速度が遅い学習者が単一の評価方法によって学習意欲が低下しないよう、多様な様式の評価方法を用意する。

(カ)多様なデジタル評価ツールを積極的に活用する。デジタル分析・評価ツールを活用して実践的な評価脈絡を提供し、多様な学習者データを体系的に構築する。オンラインおよびのプラットフォームの特性を活用して、言語機能や文化理解レベルをバランス良く評価するように計画する。

(キ)教師は評価結果を継続的にモニタリングし、教授・学習を振り返り、評価改善に活用する。学習者には評価結果に基づいて個別化されたフィードバックを提供する。

(2)評価方法

(ア)統合言語機能の評価は、教授・学習の過程で統合的な課題を遂行することを通じて、協同学習プロセスと学習者中心の自己主導学習能力を含めて評価する。

(イ)ロールプレイ、クイズ、インタビューなどを活用して、基本語彙と意思疎通の基本表現を中心に、日常生活に関連する日本語を理解し表現する言語活動能力を評価する。

(ウ)絵、写真、メニュー表、図表、標識、略図、路線図などを利用して、日常生活の実際に似た状況と文脈を提供し、コミュニケーション表現を応用して対話したり状況を説明できるかを評価する。

(エ)日課、旅行計画、アンケートなど多様な主題やシチュエーションの内容を聞いて、チェックリストの完成、空欄の穴埋め、主要となる内容の確認などの活動を通じて、意思疎通の基本表現を理解できるかを評価する。

(オ)日常生活で慣れ親しんだやや長めの案内放送、広告、ポスターなどを読み、主要となる内容を理解し、対話や書き込みができるかを評価する。

(カ)やや長めのSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブドキュメントなどのデジタルテキストの主要となる情報を理解し、主要となる内容を話すか、日本語で入力できるかを評価する。

(キ)課程を重視する評価の目的に合わせて、授業中にデジタルメディアを活用した制作活動を実施評価に活用する。ただし、内容や表現の正確性などを自ら点検できる多様なウェブサイトやアプリケーションを活用できるように案内したり、韓国語で発表やディスカッションを行うなど、学習者のレベルに合わせて評価を実施する。

(ク)日本文化を調査し、絵や写真、映像を活用した創作物を作成し、ブログやSNSなどのメディアを利用して共有したり、発表・討論したりできるかを評価する。

(ケ)多様な形式の形成評価や実施評価において、教師と学習者が慣れ親しんだオンラインプラットフォームや学習機能アプリケーションなどのデジタル評価ツールを活用し、効果的かつ効率的に評価する。

(コ)文化に対する評価は、基礎的な知識だけでなく、コミュニケーションに関連する文化内容を理解しているかを評価する。

(サ)評価計画の作成時には、達成基準に基づいた最低達成水準を設定し、教授・学習活動と連携して最低達成水準を確保するための指導と評価を行えるようにする。

(シ) 学習者の日本語学習レベルと個別の特性に合わせて、レベルごとの学習課題を割り当てて最低達成水準を保証し、それに対する自己主導学習能力や協力的なグループ活動での遂行役割能力、協働能力、貢献度などを教師の観察評価、自己評価、生徒相互評価など多様な方法で評価する。

日本語会話

1．性格及び目標

1. 性格

デジタル革新を基盤とした第4次産業革命の技術は、超知能・超接続・超融合の時代への移行を加速している。未来社会は発想の転換と新たなコミュニケーション方法が展開される時代であり、地域や国境を超えた世界市民としての価値観とコミュニケーション能力を備えた人材が必要な時代である。外国語は国際化・多文化時代において、外国の文化を偏見なく受け入れ、世界市民と自由にコミュニケーションするための必須要素だ。異なる地域や文化とのコミュニケーションは個人の成長と発展に積極的な影響を与え、世界市民との共存と調和を実現するための基盤となる。

第二外国語の学習は、英語圏以外の地域に住む人々の言語や生活を理解する機会を提供し、お互いの独創的な文化や価値を共有し、交流することで人類のための新たな価値を創造する機会を生み出す。また、第二外国語は世界の多様な共同体に積極的に参加し、異なる文化を持つ人々と協力しながら生きていく学習者たちが、世界に向けたオープンな心を持ち、変動する国際情勢に対応できるようにするために不可欠な教科だ。

現在、日本語は約140か国で学習されている言語だ。日本語のコミュニケーション能力は、日本人だけでなく、世界中の日本語学習者とのコミュニケーション能力としてつながる利点がある。韓国は地理的に日本と隣接しており、古代から人的・物的な資源の交流が活発であり、政治的・経済的・文化的に緊密な協力関係にある。将来的に、より発展的な交流関係を築き、協力的な関係を構築していくためには、正しい日本に関する知識と情報の習得、相互理解が先行して行われる必要があり、そのために日本語のコミュニケーション能力は必須要素となる。したがって、日本語は韓国の外国語教育課程で重要な言語として適切に扱われるべきだ。

「日本語会話」は、一般的な選択科目である「日本語」で習得した語彙、コミュニケーション表現、文化に関する知識を基に、日常生活の多様な分野で自然かつ流暢なコミュニケーション能力を育む進路選択科目だ。学習者は「日本語会話」を通じて培ったコミュニケーション能力を基に、日本人とのコミュニケーションを通じて彼らの思考方法や生活様式、習慣を理解し、さらに世界中の日本語使用者とのコミュニケーションを通じて、オープンな思考を持ち、協力的なコミュニケーションの主体として成長することができる。

イ．目標

日常生活の多様な表現を聞いて理解し、言語文化に適した話す能力を育み、それを基に日本語でのコミュニケーションへの態度を養う。具体的な目標は以下のとおりである。

(1)多様な様式の日本語を聞いて内容を理解する。

(2)意思疎通の基本表現を活用して、状況や目的に応じた対話をする。

(3)日常の課題について自分の意思や情報を話したり、発表したりする。

(4)相手の話をよく聞き、積極的な態度でコミュニケーション活動に参加する。

1. 内容体系及び達成基準

ア．内容体系

|  |
| --- |
| ※ 文章構成は以下に示された『言語材料』に基づく。  ※ 文法は日本で刊行された『日本語文法事典（日本語文法学会編）』、『新版日本語教育事典（日本語教育学会編）』、『現代日本語文法（日本語記述文法研究会編）』などの内容を参考にする。  ・**発音および文字**: 日本語の標準的な発音と現代仮名遣い法などに従う。  ・**語彙**: [別表Ⅰ]に示された基本語彙を中心に、約550語程度の単語を用いることを推奨する。  ・**文法**: [別表Ⅰ]に示された文法要素と[別表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]の文法内容を参考にする。  ・**コミュニケーション表現**: [別表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]を中心に扱うが、必要に合わせて応用することができる。 |

|  |  |
| --- | --- |
| 主要アイデア | ・文章や対話を聞いて内容を理解し推論することは、聴解力向上に役立つ。  ・多様な表現を適切な場面で話すことは、コミュニケーションにおいて重要です。  ・相手の話に共感し、聴く態度を持つことは、円滑なコミュニケーションにつながる。  ・言語文化を理解し、地位や親密度を考慮して対話することは、コミュニケーションの基盤となる。 |
|  | 内容要素 |
| 知識・理解  カテゴリー  区分 | ・音声的な特徴（清音・濁音、長音・短音、拗音、促音など） |
| ・単語（基本的な意味、派生的な意味）  ・簡単な句（単語の組み合わせ関係、慣用的な表現）  ・簡単な文 |
| ・挨拶・自己紹介（出会い・別れ、外出・帰宅、訪問、食事、年末、新年、祝い、自己紹介、他人紹介、家族紹介など）  ・配慮・意思伝達（感謝、謝罪、ほめ、激励・励まし、断り・辞退、謙虚、遺憾、苦情、承諾・同意、希望・意志、目的、意見提示、訂正・否定など）  ・情報交換（存在・場所、時間・時刻、選択、比較、方法・理由、状態、趣味・関心、能力・可能性、経験、確認、案内、推測、陳述、状況説明など）  ・行為要求（依頼・指示、禁止、勧誘、助言・提案、許可、警告など）  ・対話の進行（ためらい、返事、感嘆、話しかける、追い問い、話題展開・転換など） |
| ・言語文化（依頼の方法、承諾・断りの方法、敬語、呼び方の方法、表現的特徴など）  ・非言語文化（身振り、手振りなど）  ・日常生活の文化（家庭生活、学校生活、社会生活、交通や通信、食事習慣、年中行事、スポーツ、マナー、幸運・祈願、旅行、環境など） |
| 過程・機能 | ・状況を描写したり説明したりする  ・オンラインやオフラインで情報を交換したり対話したりする  ・関心のある課題について調査し、意見や考えを述べる  ・状況に合わせて話したり対話したりする  ・聞いて内容を理解したり類推したりして対話する  ・詳細な情報を尋ねたり回答したりする  ・メディアを活用して要約して話す  ・地位や親密度、言語文化などを考慮して対話する |
| 価値・態度 | ・聞いた内容に興味を持ち、集中すること  ・相手の話に耳を傾け、尊重すること  ・他人との相互作用時に協力的にコミュニケーションを取る態度  ・相手の文化を尊重して話す態度  ・積極的で協力的に参加する態度 |

イ．達成基準

|  |
| --- |
| [12日本語会話01-01] 音声的な特徴に留意しながら単語や簡単な構文や文を聞いて自然に  話す。  [12日本語会話01-02] 日常生活に関連した簡単な文章や対話を聞いて内容を把握する。  [12日本語会話01-03] 簡単な構文や文を活用して様々な状況を描写したり説明する。  [12日本語会話01-04] 具体的な事実や出来事についてオンライン・オフラインで情報を交換  しながら会話する。  [12日本語会話01-05] 様々な関心事について調査し、自分の意見や考えを述べる。  [12日本語会話01-06] 意思疎通の基本表現を活用して状況や文脈に合わせて話す。  [12日本語会話01-07] 相手の話を聞いて意図を理解し推測し、対話を続ける。  [12日本語会話01-08] 日常生活に関連した詳細な情報を尋ねたり回答する。  [12日本語会話01-09] 様々なメディアで得た内容を要約して話す。  [12日本語会話01-10] 地位や親密度、言語文化の違いを考慮して状況に合わせて話す。  [12日本語会話01-11] 相手を尊重し、コミュニケーション活動に興味と自信を持ち、  積極的に参加する。 |

(ア)達成基準の解説

• [12日会01-01] この達成基準は、清音・濁音、長音・短音、拗音、促音、撥音、拍、イントネーションなどの発音上の特徴に留意しつつ、単語や簡単な句や文を聞いて自然に話すことを意味する。

(イ)達成基準適用時の注意事項

• 日常生活や学習に必要な基本的な聞く能力と態度を身につけるために、学習者の身近な主題を基にした聞く活動を行う。

• 話す活動のための例文や主題を選ぶ際には、学習者の立場を考慮し、多様な社会・文化的な素材を活用して多様性を経験できるように指導する。

• 要約する方法や主要となる内容を把握する方法などを指導する際には、学習者が日常生活で接することができる多様なメディアを幅広く活用し、情報の内容を正確に理解する能力を育成する。

• 学習者自身が自分の話す学習課程を振り返り、何を学び、感じたかを反省する日誌を作成したり、クラスメイトが記録できるチェックリストや観察記録表を作成するなど、話す活動の改善の機会を設ける。

3．教授・学習及び評価

1. 教授・学習
2. 教授・学習の方向性

(ア)言語の4つのスキルのうち、聞くことと話すことを有機的に統合して教授･学習するようにする。

(イ)学習者の能動的な学習活動が行われるようにする。教授･学習活動を設計する際には、学習者の日本語使用能力、学習タイプや戦略などを考慮し、学習者中心の授業活動を構成し、学習者が課題の目標達成のために必要な学習プロセスと戦略を選択･採択することで自律学習が行われるようにする。

(ウ)学習者の特性と達成段階を考慮して個別化された授業が行われるようにする。個々の学習者の日本語能力レベルや多様な学習者要素を把握できるデータを収集し、各自のレベルと要求に合った資料、活動、課題を選択できるようにし、個別化された学習環境を提供する。

(エ)多様なデジタル教授･学習ツールを積極的に活用して指導する。各種言語補助学習ツールを活用できる課題を与え、学習者の能動的な参加と相互作用を促進し、学習者が活気ある日本語学習を体験できるようにする。

(オ)授業環境や日本語学習内容に合わせて、多様なオンライン･オフラインの連携学習を設計する。オンライン会議システム、メタバースなどのリアルタイムな双方向プラットフォームを活用し、学習者が積極的に参加するようにする。

(カ)意思疎通の基本表現を活用し、主題および状況別に合わせて実生活や身近な日本語コミュニケーション環境を構築し、学習した言語･文化的な知識を実際の文脈で応用し体験するように指導する。

(2)教授・学習の方法

(ア) 文字や単語よりも表現に重点を置いた教授･学習活動が行われるようにする。

(イ)意思疎通の基本表現を理解し、主題や状況ごとの学習活動を展開できるようにする。仕事、旅行計画、アンケートなどの様々な主題や状況に関する内容を聞いてチェックリストの完成、インタビュー、ロールプレイ、中心となるの把握など、学習者のレベルに合った活動を行う。

(ウ)音声ソフトウェアなどを利用してイントネーションに合わせて話すようにする。ネイティ

ブと自分のイントネーションを比較し、繰り返し話す練習を通じて自然なイントネーションに慣れるようにする。

(エ)写真、メニュー表、図表、看板、略図、路線図などを活用して簡単な文章や対話を聞いて

情報を見つけたり状況を説明したりするようにする。

(オ)日常生活で馴染みのある案内放送、広告、ポスターなどを読んで中心となるを理解し、対話ができるようにする。

(カ)簡単なSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブ文書などのデジタルテキストの主要となる情報を理解し、中心となるを話したり、日本語で入力したりできるようにする。

(キ)呼称や敬称が使われる簡単な文章や対話文、映像資料などを活用して、地位や親密度などを区別し、状況に合わせて話すようにする。

(ク)デジタルデータやオンライン検索などを利用して、感謝、断り、依頼など日本人の言語文化や身振り、手振りなどの非言語文化を理解し、言語文化・非言語文化の特徴に合った表現をするようにする。

(ケ)日本語学習に持続的なモチベーションや興味を引き出すために、ロールプレイ、クイズ、ゲーム、歌などを活用し、学習者中心の教授・学習活動を行う。

(コ)教師と学習者、学習者間の活発な相互作用を促進する協働学習、問題解決学習、グループ活動（ペア、グループ、メンター活動など）、タスク中心の活動などの教授・学習方法を適切に活用する。

(サ)絵、写真、映像などを活用した創作物を作成し、それをブログやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を通じて共有したり、学習者間の発表やディスカッションによってコミュニケーションできるようにする。

(シ)デジタルベースの学習者中心の授業を設計し、それを拡大して学習者のデジタルリテラシーを高め、日本語学習に適したメディアの使用方法を身につけるようにする。

(ス) 教育情報技術を活用したオンライン・オフラインの連携型授業モデルを開発し、生徒ごとの学習データを活用して学習者のレベルに合わせた段階的な課題を提示し、フィードバックを通じて効果的な学習が行われるようにする。

(セ)スマートフォン、タブレット、コンピューターなどのデジタルメディアを活用して、学習者のレベル、特性、状況に応じた活動や課題を実施することで、自己主導的な学習が行われるようにする。

(ソ)最低達成水準を保証するために、日本語学習のレベルと個人の特性を考慮し個別化された学習活動や協力型のグループ活動をサポートする。これにより、学習者の日本語学習への興味とモチベーションを高め、学習者が自律的に学習できるようにする。

1. 評価

(1)評価方向

(ア)日常生活と関連した日本語の活用能力と能力重視の評価が行われるようにする。単純で局所的な知識の評価を避け、思考の発展を促進し、究極的には日本語の活用能力の育成が焦点となる評価を行う。

(イ)学習者の総合的な日本語能力を伸ばすために、聞くことと話すことの個別の言語機能の評価だけでなく、両方の機能を統合した評価も適切に行う。

(ウ)日常生活の実際に似た状況や文脈を提供し、学習したコミュニケーション表現を活用および応用できるかを評価するが、学習活動の性質に合わせて流暢さと正確さの重みを柔軟に調整する

(ラ)学習者が評価を学習プロセスの一部と認識し、自身の学習プロセスと成果を振り返ることができるように、評価を計画する。評価は学習の最終段階で成果を測定する行為を超えて、学習者が自身の学習の前段階を振り返り、学習計画を自律的に修正・補完できるようにする。

(マ)学習者の多様な特性や日本語レベルに応じた個別化された評価を実施する。学習者の学習スタイル、特性、日本語レベルなどを考慮した多様な評価方法を用意し、学習者に適した評価が行われるようにする。特に、学習の遅れや成長速度が遅い学習者が単一の評価方法によって学習意欲が低下しないように、多様な様式の評価方法を用意する。

(バ)様々なデジタル評価ツールを積極的に活用する。デジタルな分析・評価ツールを使用して実践的な評価コンテキストを提供し、様々な学習者データを体系的に構築する。オンラインおよびオフラインのプラットフォームの特性を活用し、言語の機能をバランスよく評価する計画を立てる。

(サ) 教師は評価結果を継続的にモニタリングし、教授・学習を振り返り、評価改善に活用する。学習者には評価結果に基づいて個別化されたフィードバックを提供する。

2．評価の方法

(ア)総合的な言語機能の評価は、教授・学習プロセスで統合的な課題を遂行しながら、協同学習プロセスと学習者中心の自律学習能力を含めて評価する。

(イ)ロールプレイ、クイズ、インタビューなどを活用して、基本語彙と意思疎通の基本表現を中心に、日常生活に関連した基礎的な日本語を理解し、表現する言語活動能力を評価する。

(ウ)絵、写真、メニュー表、図表、標識、略図、路線図などを活用して、日常生活の実際に似た状況や文脈を提供し、コミュニケーション表現を応用して対話や状況説明ができるかを評価する。

(エ)仕事、旅行計画、アンケートなど様々な主題や状況に関する内容を聞き、チェックリストの完成、空所の完成、中心となるの確認などの活動を通じて意思疎通の基本表現を理解しているかを評価する。

(オ)日常生活で馴染みのある簡単な案内放送、広告、ポスターなどを読んで中心となるを理解し、対話できるかを評価する。

(カ)簡単なSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブ文書などのデジタルテキストの主要情報を理解し、中心となる内容を話すことができるかを評価する。

(キ)プロセスを重視する評価の目的に合わせて、授業中にデジタルメディアを活用した制作活動は実施評価に活用するが、内容や表現の正確さなどを自己点検できる様々なウェブサイトやアプリケーションを活用できるように案内したり、韓国語で発表・討論させたりするなど、学習者のレベルに合わせて評価を行う。

(ク)様々な形式の形成評価や実施評価で、教師と学習者が慣れ親しむことができるオンラインプラットフォームや学習支援アプリケーションなどのデジタル評価ツールを活用して効果的かつ効率的に評価する。

(ケ)評価計画作成時に、達成基準に基づく最低達成水準を設定し、教授･学習活動と連動して最低達成水準を保証するための指導と評価が行われるようにする。

(コ)学習者個人のレベルと特性に合わせた段階別の学習課題を提示し、最低達成水準を保証し、それに対する自己主導的学習能力を評価する。また、協働的なグループ活動における役割遂行能力、協働能力、貢献度などを教師の観察評価、自己評価、生徒間評価など様々な方法で評価する。

日本文化

1. 性格及び目標
2. 性格

超知能・超連結・超融合を特徴とする第4次産業革命の時代の到来により、未来の技術変化のスピードはますます速くなっており、人工知能技術の発展は産業分野だけでなく教育分野にも大きな変革をもたらしている。さらに複雑で予測不可能な未来の社会は、新たな価値観と責任意識に基づいて、自律的で柔軟に変化に対応できる包括的な世界市民を求めている。

外国語教育は、その文化圏で生活する人々の生活様式を理解し、コミュニケーションする機会を提供すると同時に、批判的な反省を通じて自身の文化の価値を新たに発見し、他の文化と融合することによって、より良い未来のために共有し、協力する能力を育成する。

日本は、人的・物的交流を通じて韓国と長い時間を共有してきた国として、政治的・経済的・文化的に密接な相互協力関係を築いてきた。今後も様々な形態の協力と連携を通じて発展的な関係を継続していく必要がある重要な国だ。日韓の間で友好的な協力関係をさらに発展させるためには、コミュニケーション能力を基盤として文化の多様性を理解し、共同体と共に生きていく能力を持った人材の育成が切実に必要だ。この意味で、日本語と日本文化は、韓国の外国語教育課程で決して軽視できない重要な学習対象だ。

「日本文化」は、日本の日常生活や社会文化全般に関する内容を幅広く理解し、基礎的なコミュニケーション能力を培うと同時に、自身の関心分野や進路と連携する融合的な選択科目です。「日本文化」を学習することにより、私たちの文化に対する主体的な態度を基に、日本の多様な有形・無形の文化資産や生活様式、価値観、世界観などを相互文化的な観点から深く理解し、配慮と尊重の態度でコミュニケーションを図ることで、広い視野と包容力、創造性と主導性を備えた世界市民として成長することができるだろう。

イ．目標

広範な日本文化の理解を通じてコミュニケーションの場面で活用し、相互文化的な観点から他の文化を配慮し尊重する態度を育み、世界市民の意識を養成することを目標とする。具体的な目標は以下の通り。

（１）日本人の言語文化や非言語的な文化の特徴を理解し、コミュニケーションを取る状況で活用する。

（２）直接的または間接的な経験を通じて日本文化を体験し、相互文化的な観点から理解する。

（３）日本文化の理解を基に、他の文化に対する包容力と文化的感受性を持つ世界市民としての共同体意識を育む。

（４）多様なデジタルメディアを活用して日本の関心分野について情報を調査し、相互協力的な態度で意見や情報を交換する。

1. 内容体系及び達成基準
2. 内容体系

|  |
| --- |
| ※言語内容の構成は、以下に示す『言語資料』を基にする。  ※文法は、日本で発行された『日本語文法辞典（日本語文法学会編）』、『新版日本語教育辞典（日本語教育学会編）』、『現代日本語文法（日本語記述文法研究会編）』などの内容を参考にす　る。  ・発音および文字: 標準的な日本語の発音と現代仮名遣い法などに従う。  ・語彙: [表Ⅰ]に示された基本語彙を中心に約300語程度の単語を用いることを推奨する。  ・文法: [表Ⅰ]に示された文法要素および[表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]の文法内容を参考にする。  ・コミュニケーション表現: [表Ⅱ]に示された[意思疎通の基本表現]を中心に取り扱う。 |

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 主要アイデア | ・日本の社会的・文化的背景の理解は円滑なコミュニケーションに役立つ。  ・相互文化的な観点から日本文化を理解することは、文化的な感受性と協力的なコミュニケーション能力の基盤となる。  ・直接的および間接的な文化体験に対する開放的な態度は、共同体意識と世界市民意識の醸成と結びついている。 | |
|  | 内容要素 | |
| 知識・理解  カテゴリー  区分 | 言語内容 | ・語彙、句、文章  ・コミュニケーション表現  ・言語文化（挨拶、頼み方、断り方、呼び方、表現の特徴など）  ・非言語文化（身振り手振り、接触する行動、パーソナルスペース意識など） |
| 文化内容 | ・日本の概観（自然、地理と行政区域、気候など）  ・日常生活文化（家庭生活、学校生活、社会生活、交通と通信、食文化、年中行事、スポーツ、祭り、願掛け・祈願、レジャー、生活安全、資源活用、環境など）  ・大衆文化（歌、漫画、アニメーション、ドラマ、映画など）  ・伝統文化（伝統遊び、茶道、書道、花道、歌舞伎など）  ・芸術文化（文学、美術、建築、ファッションなど）  ・その他（観光名所、人物、歴史、政治、経済、医療、福祉、教育、サービスなど） |
| 過程・機能 | ・日本文化を理解し、直接的または間接的に体験すること  ・テキストの主題を見つけたり、内容を要約すること  ・文化に関する情報を調査し、分析・整理すること  ・デジタルメディアを活用して日本文化内容を説明すること  ・文化の内容や情報をオンラインやオフラインで共有すること  ・文化の内容をコミュニケーションの場面で活用すること  ・関心分野と結びつけて文化の内容を調査し、整理・深化させること | |
| 価値・態度 | ・日本文化への好奇心  ・日本文化への包容的な姿勢  ・相手の言葉に対する尊重と共感的な態度  ・日韓文化の違いに対する認識とアイデンティティ形成  ・他者との相互作用時に協力的にコミュニケーションする姿勢 | |

イ．達成基準

|  |
| --- |
| [12日本文化01-01] 日本文化内容を理解する。  [12日本文化01-02] 日本文化に関する多様な文章やデジタルテキストから主題を見つけたり、内容を要約する。  [12日本文化01-03] 日本文化内容を調査し、情報を分析･整理する。  [12日本文化01-04] 様々なメディアを活用して日本文化内容を説明する。  [12日本文化01-05] 日本文化内容を相互文化的な観点でオンライン･オフラインで意見を共有する。  [12日本文化01-06] 言語文化･非言語文化を含む日本文化内容を日本語のコミュニケーションの状況に合わせて表現する。  [12日本文化01-07] 日本文化と自分の関心分野を結びつけて情報を調査し、内容を整理･深化させる。  [12日本文化01-08] 日本文化に対して好奇心を持ち、授業や課題活動に積極的に参加する。 |

1. 達成基準の解説

• [12日本文化01-01/03/04/05/06]この達成基準で言及されている「日本文化内容」とは、3. 内容の構成で提示された(5)文化領域の「知識･理解」のカテゴリーに属する「内容要素」を言う。

• [12日本文化01-02]この達成基準は、印刷物をはじめとするスマートフォンやコンピューターなどのデジタルメディアを基にして作成されたSMS、メール、ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、ウェブ文書などの文章を読み、主題を見つけたり内容を要約することを言う。

• [12日本語01-05]この達成基準は、文化の多様性と相違点を認識し、韓国人と日本人が志向する価値観を相互に理解し、尊重しながら、日本文化に関する調査･整理を行い、オンラインおよびオフラインで発表･討論し、情報や意見を共有することを言う。

・[12日本語01-06]この達成基準は、コミュニケーションの状況で日本人の言語文化･非言語文化を活用し、日常生活文化や伝統文化などの文化内容を素材で扱うことを言う。日本語の言語文化の特徴としては、依頼方法、承諾･断る方法、呼称方法、ほめる方法、表現の特徴などが挙げられる。表現の特徴の例としては、慣用的表現（顔が広い、となりの花は赤いなど）、結婚式で慎む言葉（切る、別れる、戻るなど）、病院で慎む言葉（お元気ですか、さようならなど）、別れ際に用いる様々な表現（さようなら、お気をつけて、お元気でなど）、韓国語と表現方法が違うもの（あれこれ、行ったり来たり、もう一度など）などがある。非言語文化の特徴としては、自身を指で指す際に人差し指で自分の鼻を指したり、食前食後に両手を合わせる動作などが挙げられる。

・[12日本語01-07] この達成基準は、日本文化に関連する内容の中から自分の進路や関心分野の主題に関する情報を調査･整理し、発表や討論を通じて深化させたり、レポートなどを作成することを意味する。

(イ)達成基準適用時の注意事項

・学習者のレベルを考慮し、韓国語で実施できるようにする。

・学習者の認知レベルや言語使用能力を考慮し、読む材料の種類を多様化し、学習者が日常生活で接することができるメディアを広く活用して読む活動に興味を持つようにする。

・発表や討論の内容を構成する過程で、多様なメディアを通じて主題や目的に適した情報を検索･収集し、整理する活動を経験できるようにし、日韓の文化の共通点と相違点を理解し、発表できるようにする。

・学習者が多様なメディアを活用して日本文化内容を調査し説明する際には、信頼性のある機関の資料を活用できるように案内し、情報の出典を記すことができるように指導する。

・情報をオンラインで共有する際には、著作権が侵害されないように留意する。

1. 教授・学習および評価
2. 教授・学習方向

(ア)学習者の能動的な学習活動が行われるようにする。教授･学習活動の設計時に学習者の日本語使用能力、学習タイプ、戦略などを考慮し、学習者中心の授業活動を構成し、学習者が課題の目標達成のために必要な学習過程と戦略を選択し、自己主導的な学習が行われるようにする。

(イ)学習者の特性と達成段階を考慮し、個別化された授業が行われるようにする。個別の学習者の日本語能力レベルや様々な学習者要素を把握できるデータを収集し、各々のレベルと要求に合った資料、活動、課題を選択させるなど、個別化された授業環境を提供する。

(ウ)学習の選択の機会を与え、学習者の要求や個別の関心事に合わせて、単元と関連する資料、議論内容、活動方法などの選定プロセスに学習者が参加できるようにし、自身の進路や将来の生活とつなげて学びを拡大するようにする。

(エ)多様なデジタル教授･学習ツールを積極的に活用して指導する。各種言語支援学習ツールを活用できる課題を与えて、学習者の能動的な参加と相互作用を促し、学習者が生き生きとした日本語学習を体験できるようにする。

(オ)授業環境や日本語学習内容に合わせて、様々なオンライン･オフラインの連携学習を設計する。オンライン会議システムやメタバースなどのリアルタイムな双方向プラットフォームを活用し、学習者が積極的に参加するようにする。

(カ)日本文化の学習を通じて文化の普遍性と多様性を理解し、相互文化的な観点から日韓文化を比較し、発表や討論を通じて多様な価値を尊重する包括的な民主市民としての態度を育むように指導する。

(キ)相互コミュニケーションと協力によって課題を解決する経験をさせ、これを通じて他人への配慮、共同体的な価値観とともに自己主導的、問題解決能力、創造性を育成する。

(2)教授・学習方法

(ア)教師と学習者、学習者間の活発な相互作用を促すために、協同・協力学習、問題解決学習、小グループ活動（ペア・グループ・メンター活動など）、タスク中心の活動などの教授・学習方法を適切に活用する。

(イ)文化探究に関連したプロジェクト活動では、有用な情報を検索できる多様な経路を示し、検索された情報をオンラインおよびオフラインで発表・討論できるグループワークの授業を行う。

(ウ)絵画、写真、映像などを活用した創作物を作成し、それをブログやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を活用して共有したり、学習者間で発表・討論することでコミュニケーションを図ることができるようにする。

(エ)日本文化の中から自分の関心分野や進路と関連した主題を選び、情報を調査し、整理した内容を基に報告書、パンフレット、ポスター、カードニュース、映像など多様なコンテンツを制作し、オンラインおよびオフラインで共有できるようにする。

(オ)ビッグデータや人工知能を活用して、日韓の文化の変遷などを調査し、将来の社会を予測し、議論することができるようにする。

(カ)デジタルデータやオンライン検索などを利用して、日本人の言語文化や身振り、手振りなどの非言語文化を理解し、言語文化や非言語文化の特徴に合った表現方法を身につけるようにする。

(キ)様々な実物や視覚的、デジタルな資料を提供することで、日本文化の内容を理解し、生き生きとした直接的な文化体験をすることができるようにする。

(ク)簡単なSMS、メール、ブログ、ソーシャルメディア（SNS）、ウェブ文書などのデジタルテキストの主要となる情報を理解し、主要となる内容を話したり、日本語で入力できるようにする。

(ケ)デジタルベースの学習者中心の授業設計と拡大を通じて、学習者のデジタルリテラシーを向上させ、日本語学習のための適切なメディア活用法を習得させる。

(コ)教育情報技術を活用したオンラインとオフラインを連携させた授業モデルを開発し、生徒ごとの学習データを活用して、学習者のレベルに合わせた段階的な課題を提示し、フィードバックを通じて効果的な学習を促す。

(サ)スマートフォン、タブレット、コンピューターなどのデジタルメディアを活用して、学習者のレベル、特性、状況に合わせて活動や課題を実施し、自己主導的な学習が行われるようにする。

(シ)最低達成水準の保証のために、日本語学習のレベルと個人の特性を考慮した個別化された学習活動や協力的なグループ活動をサポートする。これにより、学習者の日本語学習への興味と動機を高め、学習者が自己主導的に学習できるようにする。

1. 評価
2. 評価方向

(ア)評価項目は達成基準に基づいて開発する。授業や学習が進行中に形成評価を実施し、学習者の達成基準到達度を確認し、学習上の問題点を把握して、将来の学習に対する方向性を示す。

(イ)断片的で局所的な知識の評価を避け、学習者の思考発展を促進できる能力重視の評価が行われるようにする。

(ウ)学習者が評価を学習プロセスの一部と認識し、自身の学習プロセスと成果を反省するように評価を計画する。評価は学習の最終段階で成果を測定する行為を超えて、学習者が自身の学習全過程を振り返り、学習計画を自律的に修正・補完できるようにする。

(エ)学習者の多様な特性や日本語レベルを考慮した個別化された評価を実施する。学習者の学習スタイル、認知的特性、日本語レベルなどを考慮し、多様な評価方法を用意して学習者に合った評価が行われるようにする。特に、学習不振や成長速度が遅い学習者が単一の評価方法によって学習意欲が低下しないように、多様な様式の評価方法を用意する。

(オ)様々なデジタル評価ツールを積極的に活用する。デジタルな分析･評価ツールを活用して現実的な評価脈絡を提供し、様々な学習者データを体系的に構築する。オンライン･オフラインのプラットフォームの特性を活かして、言語機能や文化理解のレベルをバランス良く評価するよう計画する。

(カ)プロジェクト形式の評価を実施する際には、学習者の生活と関連した意義深い脈絡を提供し、学習者が自身の興味や関心事を考慮して評価課題の設計に直接参加できるようにする。

(キ)教師は評価結果を継続的にモニタリングし、それを教授･学習に循環させて授業改善に活用する。学習者には評価結果を基に個別の個別化されたフィードバックを提供する。

(2)評価方法

(ア)達成基準に到達するかどうかを確認するための集中学習、メンター活動などに対する形成評価を随時実施することで、協同学習過程と自己主導的学習能力を評価する。

(イ)評価の目的や状況によって、学習者の日本語レベルに適した多様な評価方法を設計し、学習者が言語使用能力を十分に発揮できるようにする。

(ウ)実施評価は授業活動と連携して実施するが、学習者に対して評価の目標、内容、採点基準などを明確に通知し、実施する。

(エ)課程を重視する評価目的に合わせて、授業中にデジタルメディアを活用した制作活動は実施評価に活用するが、内容や表現の正確性などを自己点検できる様々なウェブサイトやアプリケーションを活用できるよう案内したり、発表・討論させるなど、学習者のレベルに応じた評価を実施する。

(オ)多様な形式の形成評価や実施評価で、教師と学習者が慣れ親しむことができるオンラインプラットフォームや学習機能アプリケーションなどのデジタル評価ツールを活用して効果的かつ効率的な評価を行えるように設計する。

(カ)文化に対する評価は基礎的な知識だけでなく、コミュニケーションと関連した文化内容を理解しているかどうかを評価する。

(キ)デジタルメディアを活用した制作活動は実施評価に活用するが、学習者のレベルを考慮して翻訳機を使用させたり、韓国語での発表・討論をするなど、学習者のレベルに応じた評価を実施する。

(ク)評価計画を作成する際に、達成基準に基づいた最低達成水準を設定し、教授・学習活動と連携して学習者の最低達成水準を保証するための指導と評価が行われるようにする。

(ケ)学習者の日本語学習レベルと個人の特性に合わせたレベル別学習課題を割り当て、最低達成水準を保証し、それに対する自己主導的学習能力や協力型グループ活動での役割遂行能力、協働能力、貢献度などを教師の観察評価、自己評価、生徒間評価など多様な方法で評価する。